

第26回 熊本市市民公益活動支援基金運営委員会議事録（要旨）

1 開催日時：平成30年5月31日（木） 10時00分～11時00分

2 開催場所：熊本市役所 12階会議室

3 市民公益活動支援基金運営委員

- ・出席者： 古賀 倫嗣 委員長（放送大学 熊本学習センター 客員教授）
越地 真一郎 副委員長（熊本日日新聞社 NIE専門員）
水野 直樹 委員（一般社団法人 スタディライフ熊本 理事）
中島 久美子 委員（特定非営利活動法人
熊本県子ども劇場連絡会 理事長）
吉永 京子 委員（公募市民）
紫垣 正刀 委員（市民局市民生活部長）
藤川 潤子 委員（政策局秘書広聴部広聴課長）

4 配布資料

- 資料1 熊本市市民公益活動支援基金運営委員会 委員名簿
- 資料2 冠基金の運用について
- 資料3 冠基金の設定について
- 資料4 平成30年度スケジュール
- 参考資料 広告事業実施要綱及び掲載基準

5 会議録（要旨）

【2 委員紹介】

（資料1に基づき、事務局より委員紹介）

（古賀委員）

今年の4月から放送大学に着任した。市民活動関係では、特定非営利活動法人 NPOくまもとの代表理事を引き続き勤めさせていただいている。どうぞよろしくお願いいたします。

（越地委員）

職務上で直接市民公益活動と繋がるものはないので、そこは多少後ろめたく思っている。ただ、前回から運営委員会に参加させていただき、このNPOというものは、私がそれまで縁が薄かった、関心が低かったということの裏返しだろうが、知れば知るほど味があるというか、奥が深いというか、可能性がいっぱいあるというか、そういった発見を次々に体験している。そこが自分自身の一番の楽しみでもある。よろしくお願いいたします。

(水野委員)

以前、当基金を創設するときの検討委員として参加させていただいており、改めて今回また参加させていただくことになった。以前は個人としての参加だったが、いまは一般社団法人スタディライフ熊本という生涯学習支援事務所を運営しており、その立場で関わらせていただけたらと思っている。よろしくお願いいたします。

(中島委員)

熊本のNPO法人やボランティアで活躍されている方の元気が、この何年間か関わらせていただく中でますます生き生きしていると感じている。私もこの委員会に参加させていただいて、いろんな方と関わって、広がっていく方向が見えていき、その一助になればいいなと思っているのでよろしくお願いいたします。

(吉永委員)

ボランティアだけ、それも地域にこだわり続けて40年活動して、隣が隣を支えると青森まで20年ぐらいで行けるかなと思っていたら全く広がらず、それでも北部地域だけでは、中学生、高校生、大学生、そして各地に散らばっていた子ども達が、私が歳を取って活動を辞めると言ったら地元に戻ってきて、私の下で副代表が4人、職場を辞めて、北区の事務所に採用されてというように活動を続けている。初めてのことで何もわからないが、どうぞよろしくお願いいたします。

(紫垣委員)

今年で2年目になる。よろしくお願いいたします。

(藤川委員)

前回から引き続き運営委員を担わせていただく。どうぞよろしくお願いいたします。

【3 委員長・副委員長選出】

(事務局)

熊本市市民公益活動支援基金運営委員会運営要項第4条及び第5条に基づき、委員長並びに副委員長の選出を行いたい。なお、委員長は、要綱により互選で定めるとなっているが、いかがだろうか。

(中島委員)

古賀委員がいいと思う。

(吉永委員)

私もそう思う。

(事務局)

事務局の案としても、何もご意見がなければ、前期の委員長を経験されている古賀委員を委員長に推薦したいと考えていた。古賀委員、いかがでしょうか。

(古賀委員)

はい、謹んでお受けします。

(事務局)

それでは、古賀委員に委員長職をお願いいたします。

次に、副委員長の選任については、どなたか副委員長のご推薦等はあるか。

(古賀委員)

ただいま委員長を仰せつかった古賀でございます。副委員長については、これまで委員長が推薦するという慣例もあるため、私の方から推薦させていただいてもよろしいだろうか。

副委員長職については、昨年も副委員長として大変尽力いただいた越地委員を推薦させていただきたい。いかがだろうか。

(一同)

異議なし

(越地委員)

はい、わかりました。

(事務局)

改めて、古賀委員長と越地副委員長から一言ずつお願いいたします。

(古賀委員長)

ただいま委員長職を仰せつかった古賀でございます。3月までは熊本大学に在籍していたが、4月からは熊本大学の敷地内にある放送大学で、週に一度、木曜日の午後に非常勤で客員教授として勤めている。

さて、本運営委員会は、委嘱状にははっきりとした任期が書かれていないが、ご存知ない方がいるかもしれないので念のために申し上げますと、3年間である。市役所の委員会は2年の任期が多いので、ちょっと珍しいのでご説明しておきたい。

先程、伊東課長からご挨拶があったように、本運営委員会は今年で7年目を迎える。つまり3期目の初年度ということである。そういうことで、私は2期目から参加させていただいており、1期目は、県立大学におられた明石先生のもとで制度設計をどのように具体化させていくのか、特に制度設計時に議論されたことだが、熊本らしさや地域にどう貢献するのかなど、明石委員長のもとで大変な議論をされたと同っている。そのおかげで、2期目は、事務的にというと語弊があるかもしれないが、基金をどのように活用するかということで、プレゼンテーションに即して、それぞれの団体のいいところ、あるいは、準備不足だと感じるころなどを含

めての議論を3年間させていただいた。そういったものを本年度からどのように活かしていくのかという改善の余地や課題があると認識している。

先程お話があったように、当基金の認知度向上に対する啓発、宣伝、広報といった議論等があるが、委員の皆様方のお知恵を拝借しながら、よりよい制度になるよう努めたいと思うのでどうぞよろしくお願いいたします。

(越地副委員長)

前回副委員長であったということを委員長がおっしゃったが、事実そうではあるが、期間はわずかで、副委員長が途中でお辞めになったので、その後任を選ぼうということから副委員長になった経緯がある。そのときは、市の関係者と公募員を除けば私と中島委員の二人であり、いわばじゃんけんで決めるようなもので、私が負けたのか勝ったのかわからないが、そういった経緯だった。そういう意味では、まったく初めての副委員長職という捉え方をお願いしたい。

これだけの会議なので、個人的には副委員長がなくても問題ないのではないかなと思うが、委員長に何かあるときはその職務を代理しなければならない。そう考えると、委員長にひとつお願いがある。先程ちょっと雑談していたら、最近体の調子が悪くなってきたと話されていたので、願わくば運営委員会の日は休まないように、突発的な病気があっても無理して出てきていただくようお願いしておきます。よろしくをお願いいたします。

【議事事項】

(1) 冠基金の運用について

(資料2に基づき、事務局より説明)

(古賀委員長)

ネーミング期間を100万円につき1ヶ年度を基準とする考え方が、いかがだろうか。

審議の前に、非常にびっくりしているのが400万円もの寄附があったということで、少しその辺りについてどういう経緯でそんなに大きな金額の寄附があったのか、前置きとして説明いただける範囲で結構なので教えていただきたい。

(事務局)

詳細は次の議事でも説明させていただくが、ただいまご質問があったので、資料3をもとに少しご説明させていただきたいと思う。

資料3の(2)にあるように、公益社団法人 熊本法人会様より、3月に400万円の寄附をいただいている。簡単な経緯を申し上げますと、熊本地震をきっかけに各法人会から熊本法人会宛に対していわゆる義援金のような寄附があり、熊本法人会様ご自身でも「肥後にわか」や社会貢献事業等にお使いになられたが、それ以外の法人ではなかなか使い切れない部分があり、これをぜひ市民公益活動に使っていただきたいとして、寄附先として当基金をお選びいただいたという経緯である。

(古賀委員長)

そういったことで今回の改正が必要になったということだが、いかがだろうか。

(越地副委員長)

今回の熊本法人会に関しては非常にメリットがあるが、一方で今後１００万円の寄附がきた場合、これまでは１００万円の冠寄附が２年間通用していたのであれば、これをデメリットというかは別として、設定期間が単年度で終わってしまうという問題もある。改正案のメリットは非常に大きいと思うのでこれでいいと思うが、この辺をどう考えるかということを一整理しておきたい。東京エレクトロン九州のように毎年寄附いただく場合は問題ないと思うが、１００万円の寄附だと設定期間が１年間で終わってしまうということに対して、なにか救済のようなものがあればいいと思う。または、それはそれで割り切って、わかりやすい説明をするのかということだが。

(事務局)

前回の第１９回委員会での改正で冠の設定期間を１年に改めているが、それまでは、分野指定別制度に基づき、いただいた寄附をどの分野で使って欲しいか指定してもらい、それをどう使うのかという運用だったので、冠寄附の場合も、医療分野を指定されたら、医療分野で助成して、その１年度で使い切らなかった分については、翌年度まで繰越しできるという考え方だった。

その分野指定を廃止したことに伴い、冠寄附による助成の仕方も、その他の一般的な寄附とあわせて総体的に助成するという考え方に改めたことから、繰越しという考え方をなくしており、第１９回の委員会では、１００万円のご寄附をいただいたら、シンプルに１年間の設定期間でよいのではないかとこのところで皆様にご審議をいただいたところである。

これまで、冠寄附は１００万円以上という下限があるため、それが基準となって運用されていた。今回もその基準をもちいた改正案とさせていただいた。

(古賀委員長)

つまり、現状では４００万円の寄附があっても１年度しか設定できなかったが、それを今回、寄附者の意思に沿ったかたちで、社会貢献としてきちんと評価していこうという部分が大きな改正点である。１００万円が１年度ということについてはある程度議論させていただいているので、このことで問題が発生したときに、また改めて議論するということではいかがだろうか。

確かに１００万円で１年間というデメリットの部分もあるかもしれないが、これはこのまま原案どおり認めさせていただき、今後改善の必要があれば、その際に議論するという整理でよろしいか。

(一同)

異議なし

(古賀委員長)

それではこの件については、原案どおり承認とさせていただく。

(２) 冠基金の設定について

(資料３及び参考資料に基づき、事務局より説明)

(水野委員)

名前はこれでいいのではないかと思うが、以前の分野指定での冠基金は、「この分野の事業はこの冠基金から助成されている」という表記があった。今回の改正案だとグロス（総計）での助成になるので、全体としての助成ということは、受けられた事業すべてがこの名前を表記して活動してもらうという考え方でいいのか。

(事務局)

おっしゃるとおり。

(水野委員)

これをすべて記載すると長くなると。

(事務局)

3行くらいにはなるかと思われる。

(越地副委員長)

熊本法人会からの寄附だが、これは非常にすごいことだと感謝したい。先程経緯についての説明があったが、これは向こうから提案があったということか。

(事務局)

元々当基金をご存知だったようで、初めから冠寄附をしたいという相談があった。

(越地副委員長)

これから同じような高額寄附者を集めていく上でのヒントになる。つまり、こちらから働きかけるべき眠っている団体、いうなれば掘り起こす層というものが他にもあるのではないかという可能性を感じさせる。これほど多額じゃなくてもいいので、寄附者としてそこまで気がつかなかった、知らなかったところもいっぱいあるだろう。しかし、言われてみると公益的な団体というのは、元々こうした社会貢献の気持ちを持っていて、志があるので、そういえばこういう団体があるんだなと開拓することができる。そういう意味では、特に公益関係の団体には、セールスやアピールできる余地を匂わせるなあという感じがした。できれば、こういうところにアタックしていただきたい。こういった団体とは元々性格が近いので、そういう思いもした。

(中島委員)

これまで冠基金をされる団体が1団体だったのでよかったが、他の団体と二つ並ぶことについての合意などはないだろうか。

(事務局)

そのことについては、昨年その他の寄附と合わせた総体的な助成に切り替えた際に、それぞれに冠名を併記させていただくが、その分すべての事業が対象になるため、本来100万円だったら数事業しか助成できなかったところを、15事業なら15事業すべてが冠名をつけて活動することに

なるので、そういったところからご説明をして、了承いただくものと考えている。

また改めて、中島委員からのご指摘の部分は、二社にきちんと説明させていただく。

(古賀委員長)

併記する場合の順序はどうなるのか。事務局にお任せするが、その辺りの考えがあればお聞きしたい。

(事務局)

寄附の日付だったり、金額だったり、いずれかの方法で公平になるよう検討させていただきたい。

(古賀委員長)

あとで説明ができるようにお願いしたい。

以前、分野指定別だったときには、株式会社 えがお様と株式会社 コスギ不動産様の二社が同時に寄附されたことがあるが、特段そういったことでの問題はなかったように記憶している。

今回、400万円という高額寄附をいただいたわけだが、毎年200万円程度の助成をおこなっている。そのため、今回の冠寄附だけでトータル500万円の寄附になるが、今年度助成で全部吐き出すのではなく、おいおい計画的に運用していくこととし、細かいことはまたこれから審議するということで、今回の審議はこのぐらいで了承としてもよろしいか。

(一同)

異議なし

(古賀委員長)

先程越地副委員長からもあったように、個人寄附と大きな団体寄附といったところを、少しメリハリをつけていきたいと思う。とにかく、震災のあとでそういった寄附の機運というものが非常に大きくなっているように感じるので、その辺りはきちんと、どのような使い方をしたという助成団体の報告と、寄附者の社会的な評価を広報するようなことについて、これから議論させていただければと思う。

(越地副委員長)

東京エレクトロン九州の冠名に「マッチング」という言葉があるが、非常にいい単語だと思う。いまの話をこの「マッチング」になぞらえると、寄附をしたいと思っているところとお願いしたいと思っているところが上手くマッチしているかどうか。意外とミスマッチで終わって勿体ないなあということもあるのではと思う。その辺のアピールをいろんなかたちでやっていけば掘り起こしができるのではないか。

(古賀委員長)

分野指定別のときは、それぞれの寄附者の想いがそのまま寄附や助成に反映し、助成された団体の想いと共鳴するところが目に見えるかたちで表れていたが、総合的な助成制度にしたことによる危惧がいま言われたところなのかもしれない。だからこそ、その辺りを広報の部分で説明していく

必要があるのではないかと理解しているところ。

それでは、他にご意見等がなければ、議事の「(2) 冠基金の設定について」を原案どおり承認とさせていただきます。

【5 次回委員会の開催について】

(資料4に基づいて、事務局より説明)

(古賀委員長)

ただいまの説明について、ご質問あるいはご意見等はあるか。おおむね例年どおりのスケジュールということである。なければ、せっかくなので委員の皆様で何かご発言されるようなことがあれば、どうぞよろしくお願いいたします。

(越地副委員長)

もう少し時間があるならば、何か参考になればと思うので、その時間をいただきたい。資料をコピーしてきたので、これを配ってもらっていいだろうか。お手元の資料で、この事業についてちょっと振り返る場になればと思う。

先程委員長が、広報が大事だと言っていたが、おっしゃるとおりだと思う。広報にはいろんなスタイルがあるが、やっぱり熊本日日新聞がこういった広報のチャンスが多い。そこで、お手元に配っているのが、この「くまもと・わくわく基金」の全掲載記事である。いまはデータベースですぐに検索できるので、今日初めて思いついてお持ちした。全部で20枚、20件ある。これらからいろんな動きや課題なんかも垣間見えるのではないかという気がする。

まず、6年前の2012年にスタートしたということが1枚目に書かれている。駆け足で見出しだけ見ていくと、2枚目には300万円の助成を見込んでいるとある。3枚目、地元二社が大枠での寄附をして、感謝状を渡している。これは、先程話があったコスギ不動産と流泳館 熊本西部スイミングクラブへの贈呈式だが、いまでも感謝状を渡しておられますよね。ただ残念ながら報道はされていない。感謝状贈呈の記事はこれ1件しかなかった。記者クラブに投げ込んだとしても、報道機関がこないのは仕方がないが、ぜひこういうかたちで表に出ることで、大枠の寄附に対する効果もあるだろうなあと思っている。

次に、4枚目は「わくわく基金」への申請がいまひとつだという記事で、2012年のものだが、申請が4つしかなかった。この辺りはだんだん増えてきて、広がりがあるなあと思う。

5枚目を飛ばして6枚目が、寄附金付自動販売機を設置するという記事。これはいまでも有効活用されているようである。7枚目は助成審査の記事。当初は、やっぱり丁寧に報道もなされているようである。

8枚目は、助成を受けた団体が活動報告を行った記事で、9枚目はパネル討論があったという記事。10枚目は、プロレスの収益金が「わくわく基金」に寄附されたという記事。そういうものもあったんだなあと思う。11枚目は、19団体に295万円助成が決定し、その使い方の一つとして、漱石像にスーツを着せたというもの。新聞は実は、こういうものに食いつくんですね。本当は感謝状贈呈式あたりを丁寧に報道して欲しいが、やっぱり面白い内容だとすぐに取材に行って、「な

んだいつものやつだ」となると取り上げてもらえない。

13枚目は活動報告の記事、先程出た分野別寄附を廃止するというひとつの分かれ目が14枚目に書いてある。15枚目が2016年度は200万円の予算でいくこと。16枚目は15団体に助成すること。そして17枚目は報告会についての記事。18枚目は募集が始まる記事。19枚目は、今年3月に団体の交流会があって、その取材が行われている。そして20枚目が一番新しいものだが、15団体に助成が決定したというもの。

それで、ここから何がいくつ見えてくるかということは、例えば先程の感謝状なんかは、せっかくそういうご厚意をいただきながら、広報という点で新聞が食いつかなければ、関係者だけの周知で終わってしまう。その辺がなんとかできたらいいなと思う。

あとは、データベースは、皆さんご存知のとおりキーワードで検索をするのだが、今朝それを二種類やってみた。ひとつは正式名称である「熊本市市民公益活動支援基金」というキーワードだが、これでは記事が出てこない。これに「わくわく基金」という言葉をプラスすると1件しか出てこない。つまり、残り19件は、全部「わくわく基金」だけしか出てこなくて、正式名称は載っていない。これをどう考えるか。これは別にマスコミに迎合する必要はないと思うが、やっぱり行政としては正式名称が大事だが、一方で使われるときは全部「わくわく基金」という名前でしか使われていない。その方がやっぱりアピール力があるということだろう。よって、いつかの委員会で言ったと思うが、正式名称は押さえておきながら、必ず「わくわく基金」という言葉を添えることで広がっていくという気持ちを改めて持った。やっぱり「わくわく基金」という言葉で食いつくんだなあ。

これは報道機関に限らず、一般の人達も、十数文字ある正式名称だけでは、最初から堅くて目をそらしがちなところが、「わくわく」とついているだけでなんだろうと振り返って見るということかなあと思っている。その辺が、気づきという大げさだが、参考になれば。6年間で20件が多いか少ないかというのは、その辺も判断が分かれるが、広報の一つとして地元紙ではどうであるかということから読み解いた。

あとついでに、もう一つ私なりによろしいか。

いま話を離れて、19枚目の記事に今年3月の交流会があったが、5月には報告会があった。いままで見てなかったの、どんなものか覗いてみたが、非常に有意義であったと思う。一方で、有意義であるというのは前提として、それなら、せっくなのでいろんな人に聞いて欲しい。言うなれば、助成金をもらった団体が来ているわけであって、「うちはどうした」、「うちはどうやった」とお互い勉強になる。

一方で関係者以外、団体以外の人にはゼロではなかったが、何人か見た。これから考えているという人が知り合いだけで2人はいたが、決して多くなかった。あれを広く多くの人に聞いてもらうために、演出なりを加えて、一種のフェスティバル的な要素を盛り込んで、面白そうだから行ってみようという人達を巻き込む場になればいいなと思う。その中に企業、事業者がなんらかのかたちで参加すれば、またより効果が増すなど。

団体報告を聞いていると、やっぱりすごいなあと思う。「ここまで皆さんがNPO活動をやっておられるのか、それじゃあ、我々企業も社会貢献は大事だと思っているので、こういうところだったら少しでも助力できるよなあ」という想いにつながるんじゃないかと思うが、こういう活動がい

っぱいあっているということを知らないから動きようもない。何か一緒に交流できる場や参加できる機会が欲しい。

今年3月には、寄附された二社を招いての交流会があったが、寄附者も大事だが、これから寄附するかもしれないところとの出会いの場があればいいのと思う。熊本にもいろいろ経営者協会とか、中小企業団体などのいろんな組織があって、恐らくその小さなセクションに地域貢献的なものを扱う部会というものはあると思う。大きな団体、商工会議所などを含めて、そういったものを担当する人、そういった人達に一度覗いてもらえるような場があったらと思う。

もう一つ、ちょっとしゃべりすぎて申し訳ない。そのときに、これも初めて知ったが、あいぽーとが作っておられる「あいず」という冊子。これは丁寧にどんなことが行われているか書かれており、わくわく基金のこともいっぱい書いてある。ここからまたちょっと発想、連想したことだが、事業所からの寄附と考えたときに、他にどんなものが日常的にあっているかと、各校区単位で考えれば、夏祭りや運動会、これは相当地元企業からの協賛金が出ている。私の地元だけでも、体育祭は毎年100万円ぐらいの協賛金が集まっている。それともうひとつイベントがあるが、これも数十万単位で地元が出してくれている。つまり、地元のためであればということで、事業主がお金を出している。最低5,000円だったか、一枠いくらで体育祭のパンフレットに金額に応じた広告が載る。それで、1広告で100万円という単位を考えたときに、他の校区も大なり小なり、そういう金額が事業所から出ているとすれば、相当な金額になる。この人達は、地元のためということでやっておられるので、だから集まるといえばそれまでだが、一方でこういったNPOに関しても、そこにやっぱり潜在的な要素が潜んでいるのではという気がしてならない。ではどうアタックするのかという問題まではわからないが、やっぱり儲けるだけじゃなくて何かお返ししたいという想いがいろんなところで具体化されているということを実感した。

それでその一つの例として、この「あいず」だが、これには広告はない。例えばここに、ある程度の金額を寄附なさった方を載せるとか、そのために寄附されるとは思わないが、広報ということに繋げて考えると、そういうものもあっていいのかなと。冠寄附をされた東京エレクトロン九州は広告ではなく記事というかたちで出てくるが、何かそういうものも誘い水のひとつになるかなあと思う。

(古賀委員長)

いろいろお知恵をいただきありがとうございました。いまは市役所の封筒の裏にも企業の宣伝があり、あれにもびつくりしたところだが、そういった意味では、その辺りについてもある程度柔軟にできるのかなと思っている。これについてはこちらが勝手に決めるような話ではないので、あいぽーととも十分に協議しなければならない。その中で、広告欄だとか、寄附があったからということを書きような、そういったことも含めて議論していただければと思う。

他にいかがだろうか。

(吉永委員)

私の団体が「あいず」に掲載されたが、これで広報していただいたおかげで、自分たちだけのものだった活動が、7校区ぐらいの中学校区から「そういう中学校区をつくりたい、どういうものか教えてください」といったたくさんの反響があって嬉しい限り。とっても嬉しくて、それも表紙に

障がい児と一緒にキャンプした写真が載ったので、親御さんたちにもとっても喜ばれた上に、他のところからもたくさん反響があって、ありがとうございました。

(古賀委員長)

そういった反響が一番大切だと思う。水野委員はあいぼ一とをよくご存知だが、今日初めて参加されてどうだったか。

(水野委員)

それこそ吉永委員のところじゃないが、随分と長いこと活動されていて、当時参加者だった子ども達が大きくなって帰ってきて、今度は運営側に入ると、こういった循環がもう始まっているということを日頃からお伺いしていたので、こういった基金を活用しながら、いまあるいろんな団体が活動を継続することによって、次世代に繋がっていってくれるような、そんな活動に繋がってくるといいなあと。そういった皆さんのやる気のひとつに、わくわくするようなもののひとつに、この基金がなってくれるといいなあと感じながら話を聞いていた。

(古賀委員長)

中島委員からも一言お願いします。

(中島委員)

冠基金が増えたということで嬉しく思う。企業もなんらかの社会貢献のかたちを模索していращやるところもあるだろうと思うので、そういう方のアンテナになるべく触れるように、そういう機会をいっぱい作っていかれるといいのかなあと思う。いろんな情報を出していただいたが、そういうことの積み重ねになるので、情報発信の仕方これからいろんな可能性があるのかなあと考えた。

(古賀委員長)

紫垣委員はいかがだろうか。

(紫垣委員)

先程広報という話があったが、市役所のなかには市政記者クラブがあり、テレビ局から新聞社までいろんな記者が常駐されておられるが、報道投げ込みをしてもなかなか取材していただけないということは非常に多くある。逆に言うと、その投げ込みの仕方をもう少し工夫すべきなかと、今日の意見を聞いて検討していきたいと思った。やはりこういうふうに新聞に載せていただくことは非常に大切なことかと思っていますので、その辺に力を入れていきたいと思う。

(古賀委員長)

藤川委員はいかがだろうか。

(藤川委員)

昨年度から当委員会に参加して、様々な団体がいろいろな活動をされていることを初めて知り、

いろんな情報などを収集させていただいた。私の所属する広聴課は様々な声を聴く部署なので、そういった声を団体からも聞かせていただき、それを広報に繋げていければと思っている。

【6 閉会】

（古賀委員長）

これをもって、第26回市民公益活動支援基金運営委員会を閉会とする。

（終 了）